吐蕃に於ける唯識論書の蔵訳

原 田 覺

拙稿が取り上げるのは、西暦 836 年の編纂であり、吐蕃期に蔵訳した仏典の正式な一切経目録である『デンカルマ目録』*dkar chag lDan dkar ma* (DK.) であり、目録の「X XIV. [唯] 識の論書」の項目に記載のある DK. No.614 ~ 654 の 41 仏典に対応する仏典を現存の西藏大蔵経(蔵経)に確認して、その奥書を回収し内容を検討することにより、表題の如くに吐蕃に於ける唯識論書の蔵訳事情の一端を明らかにしたい⁵⁾。但し DK. No.623 は 365 頌で 1 巻 65 頌の『瑜伽行の地から解深密の品を単独 [に] 説いたことにより別出した [論]』(DK. No.532, デルゲ版 No.4033 (注 1 註 4), 北京版 No.5535 (注 1 註 3) 参照) であり、同じく DK. No.639 は 1,551 頌で 5 巻 51 頌の『五蘊の詳説』であるけれど、以上の両仏典は対応仏典が不詳であり、また DK. No.621 は 2,100 頌で 7 巻の『沢山の地の広説』であり、同じく DK. No.622 は 6,000 頌で 20 巻の『菩薩の地の注釈』(後伝期の奥書あり) であり、同じく DK. No.629 は 4,200 頌で 14 巻の『攝秘義 [論]』であるけれど、以上の三仏典は対応仏典が奥書を欠いている⁶⁾ ので、以上の 5 仏典を除外した残りの 36 仏典が検討の対象となる。

I. 目録の項目の冒頭にある DK. No.614 ~ 620, 626 の 8 仏典は、後代のチベット仏教で無着 Thogs med の五部の地 sa sde lña とする『瑜伽行の地 [論]』(『瑜伽師地論』) を構成する五分に相当する論書である (注 5 袴谷論文参照)。

最初の DK. No.614 は 7,800 頌で 26 巻の『沢山の地のもの [の分]』(本地分) であり、奥書本文を欠くものの「ここに於いて頌は 8,984 有るのである || ||」とあり、蔵経は頌数が 1,184 頌増加している。DK. No.615 は 5,790 頌で 19 巻 90 頌の『攝本事 [分]』(攝事分) であり、奥書は「インド rGya gar の親教師 [たる] プラジュニャーヴァルマ Pradzñā varma/va-rma と | ジナミトラ Dzi na mi tra と | 大校閏の翻訳師 [で] 大徳 [たる] イェシェデ Ye śes sde が翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものである | 『瑜伽行 [の] 攝本事 [分]』から頌は 6,793 有りますものである || ||」とあり、ここでも蔵経は頌数が 1,003 頌増加している。ジナミト

ラは『二卷本語合』を編纂したインド僧の筆頭の人物であり、No.580では第二位のスレーンドラボーディ Su ren dra bo dhi の次にプラジュニャーヴァルマの名を挙げているので、ここでは翻訳の専門性を重視したのか、奥書に混乱があるのか不明である(注1註1拙稿, Ishikawa p.1 1.9; 注2拙稿参照)。DK. No.616は725頌で2巻125頌の『攝異門[分]』であり、奥書本文を欠くものの「ここに於いて頌は725有るのである」とある。DK. No.617は5,400頌で18巻の本地分の『声聞の地』であり、奥書は「インドの親教師[たる]ジナミトラと| 大校閱の翻訳師[で]大徳[たる]イエシェデ等 la sogs pa[s] が翻訳し了り且つ校閱し了って確定したものである」ここに於いて頌は6,000有るのである」とあり、蔵経は頌数が600頌増加している。DK. No.618は6,150頌で20巻150頌の本地分の『菩薩の地』であり、奥書は「インドの親教師[たる]プラジュニャーヴァルマと| 大校閱の翻訳師[で]大徳[たる]イエシェデが翻訳し了り且つ校閱し了って確定したものである」頌は6,750有るのである」とあり、蔵経は頌数が600頌増加している。DK. No.619は550/50頌で1巻250頌の『攝釈の門[の分]』であり、奥書は「インドの親教師[たる]プラジュニャーヴァルマと| スレーンドラボーディ Su rendra bodhi と| 大校閱の翻訳師[で]大徳[たる]イエシェデが校閱し了って確定したものである| [大徳[たる] チョクロ=ルイゲンツェン Cog ro Kluhi rgyal mtshan が翻訳した|]ここに於いて頌は575有るのである| 総てで頌は45,000有るのである| 巻は100と50有るのである」とし「翻訳し了り且つ」を欠き、北京版は角カッコ内の一文を保存して奥書としては破格である。但し北京版はイエシェデがルイゲンツェンの先輩であることを明示しており、留意すべきであろう。また奥書の下線部分は『瑜伽行の地[論]』全体の頌数と巻数を示すのであろう。一方ここではプラジュニャーヴァルマ、スレーンドラボーディの順に名前を挙げており、この順序が正当であるならば、プラジュニャーヴァルマはジナミトラの先輩である可能性すら生じ、むしろNo.580に対応する奥書の内容を再検討すべきこととなる。また、ここでも蔵経は頌数が増加している。DK. No.620は11,525頌で38巻125頌の『攝決択[分]』であり、奥書はNo.619とほぼ同文であり、ただ「等[が] 翻訳し了り且つ」が加わっている。

DK. No.624は900頌で3巻の『菩薩の戒律の品の単独[に]説いたものを別出した[論]』であり、奥書はNo.618とほぼ同文であり、ただ「等[が]」が加わっている。DK. No.625は1,500/1,005頌で5巻の『[その] 広説』であり、奥書は「インドの親教師[たる]ジナミトラと| プラジュニャーヴァルマと| 大校閱の

翻訳師 [で] 大徳 [たる] イェシェデ等が翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものである || ||」とあり、インド人学僧の順序は No.615, 626 と逆転している。

DK. No.626 は 600 頌で 2 巻の攝事分の『攝律』であり、奥書は No.615 とほぼ同文であり、ただ「等 [が]」が加わっている。以上で『瑜伽行の地 [論]』は完結することになるけれど、全体として蔵経の頌数が増加しているだけでなく、DK. の配列順は蔵経とも漢訳とも全く異なると共に、既に蔵訳のある No.626 を五部の構成に含めていないのである。これは五分の各々の内容が逐次に成立しただけでなく、五分の構成それ自体が逐次に成立したと共に、蔵経と漢訳に加えて DK. とする少なくとも三種の伝承系譜がインドに存在したことを示すであろう。

Ⅱ. 『瑜伽行の地 [論]』に続く仏典の内 DK. No.627 ~ 8 は無着の『攝大乘論』とその注釈であり、No.630 ~ 1 は同『阿毘達磨集論』とその注釈であり、後代のチベット仏教で言う無着の二種攝 [頌] sdom rnam gñis である (注 5 袴谷論文参照)。

DK. No.627 は 1,170 頌で 3 巻 270 頌の『攝大乘 [論]』であり、奥書は「学者 [たる] ジナミトラ Dzina mi tra とシーレーンドラボーディ Śī lendra/le-ndra/len-dra bo dhi と大徳 [たる] イェシェデが翻訳したものなのである ||」とあり「且つ校閲し了って確定した」を欠いており、破格である。シーレーンドラボーディは『二巻本語合』を編纂したインド人学僧の第三位に位置する (注 1 註 1 Ishikawa p.1.110)。

DK. No.628 は 3,030 頌で 10 巻 30 頌の『攝大乘解説』であり、奥書は「インドの親教師 [たる] ジナミトラと | シーレーンドラボーディと | 大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] イェシェデ等が翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものである [それを] | 比丘 [たる] ペルツェク dPal brtsegs が校閲者を [為し?] て確定したものである | | ここに於いて頌は 2,774 有る || 巻は 7 と為されたのである ||」とあり、No.627 の奥書も下線部分を除いて本来類似した文面であったであろう。下線部分に関して、ペルツェクが再校閲したことは可能性としてはあり得るけれど、蔵経は頌数が 256 頌減少しており、7 巻であるならば 930 頌減少していることになる。下線部分の頌数と巻数の差が 2 巻 74 頌 (674 頌) もあり、少なくともこの部分は誤伝を含むであろう。

DK. No.630 は 1,800 頌で 6 巻の『阿毘達磨集 [論]』であり、奥書は No.628 の下線部分を除外した文面とほぼ同文であり、ただ「等 [が]」を欠き、文末が「確定したものなのである」となっている。DK. No.631 は 3,300 頌で 11 巻の『その注釈』であり、奥書は No.630 と同文である。

Ⅲ. 二種攝 [頌] に続けてチベット仏教で言う世親 dByig gñen/Saḥi rtsa lag⁷⁾ の八

部の品 [類] *pra ka ra ṇa sde brgyad* とその注釈である *DK. No.632* ~ 4 の『経莊嚴論』関係と, *No.635* ~ 7 の『中辺分別論』関係と, *No.638* ~ 642 の『五蘊論』関係と, *No.643* ~ 5 の『三十頌』関係と, *No.646* ~ 8 の『二十頌』関係と, *No.649*, 650 の『釈軌論』関係と, *No.651* ~ 2 の『業成就品』関係と, *No.653* ~ 4 の『縁起広大解説』関係を列記して項目は終了する (注5 袴谷論文参照)。

DK. No.632 は 900 頌で 3 巻の『経莊嚴の頌』であり, 奥書は「インドの親教師 [たる] シャーキャシンハ Śākya sim-ha/siṅha と | 大校閱の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ペルツェク等が翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものである」 (後伝期の改訂記あり) とあり, シャーキャシンハの翻訳は以下に検討する *DK. No.633* ~ 4, 649, 650 以外に, 彼とデーベンドララクシタ *De ben dra rakṣi ta* の翻訳である *DK. No.188* と, 彼とペルツェクの翻訳である *DK. No.559*, 707 (デルゲ版 *No.4241*, 北京版 *No.5739* 参照) があり, 吐蕃末期のインド人学僧である (注5 拙稿 c 参照)。 **DK. No.633** は 2,370 頌で 7 巻 270 頌の『経莊嚴の解説』であり, 奥書は *No.632* と殆ど同文であるけれど, 奥書末尾に「『大乘全經の莊嚴 | 解説』 [たる] この典籍量は | 頌が 3,000 等とそして | 650 であるのだと共許とされた || 」とあり, 蔵経は頌数が 1,280 頌増加している。 **DK. No.634** は 3,600 頌で 12 巻の『経莊嚴の注釈解説』であり, 奥書は *No.632* と殆ど同文であるけれど「等 [が]」を欠き, 文末は「確定したものなのである || 」とある。

DK. No.635 は 70 頌の『中と辺 [の] 分別の頌』であり, 奥書は下線部分を除いた *No.628* とほぼ同文であるけれど「等 [が]」を欠き, 文末は「確定したものなのである || 」とある。 **DK. No.636** は 640 頌で 2 巻 40 頌の『その注釈』であり, 奥書は *No.635* と同文である。 **DK. No.637** は 3,500 頌で 11 巻 200 頌の『その注釈解説』であり, 奥書は *No.635* とほぼ同文であり「等 [が]」を加えている。

DK. No.638 は 132 頌の『五蘊品』であり, 奥書は「インドの親教師 [たる] ジナミトラと | シーレーンドラボーディと | ダーナシーラ *Dā na śiu/śi la* と | 大校閱の翻訳師 [で] 大徳 [たる] イェシェデ等が翻訳し了り且つ校閲し了って | 確定したものである」 とあり, ダーナシーラは『二卷本語合』を編纂したインド人学僧の第四位に位置する (注1 註1 *Ishikawa p.1 1.10*)。 **DK. No.640** は 700 頌で 2 巻 100 頌の『五蘊の注釈』であり, 奥書は *No.638* とほぼ同文であるけれど「シーレーンドラボーディと | 」と「等 [が]」を欠いている。 **DK. No.641** は 1,500 頌で 5 巻の『五蘊の解説』であり, 奥書は *No.640* とほぼ同文であるけれど「大校閱の」の代わりに「チベット Bod の」とあり「等 [が]」が加わり, 文末が「確定したものな

のである 〓 〓」とある。DK. No.642 は 1,200 頌で 4 巻の『五蘊の注釈』であり、奥書は No.638 とほぼ同文であるけれど、文末は「校閲し了って確定したものなのである 〓 〓」とある。

DK. No.643 は 30 頌の『三十の頌』であり、奥書は No.635 とほぼ同文である。DK. No.644 は 700 頌で 2 巻 100 頌の『三十 [頌] の注釈』であり、奥書の前部は No.635 とほぼ同文であるけれど、末尾は「イエシエデが校閲し了って確定したものである 〓 〓」として「翻訳し了り且つ」を欠いている。DK. No.645 は 1,575 頌で 5 巻 75 頌の『三十 [頌] の注釈解説』であり、奥書は No.638 とほぼ同文であるけれど「等 [が]」を欠いている。

DK. No.646 は 20 頌の『二十の頌』であり、奥書は No.638 とほぼ同文であるけれど「等 [が]」を欠いている。DK. No.647 は 130 頌の『二十 [頌] の注釈』であり、奥書は No.644 とほぼ同文である。DK. No.648 は 750 頌で 2 巻 150 頌の『二十 [頌] の注釈解説』であり、奥書は No.646 とほぼ同文である。

DK. No.649 は 1,800 頌で 6/10 巻の『釈軌 [論]』であり、奥書は「インドの親教師 [たる] ビシュッダシンハ Bi śuddha sin-ha/sin-ha/sin-ha と | シャーキャシンハ と | 大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ツァン = デーバーンドララクシタ gTsañ De bendra/ben-dra rakṣi ta が翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものなのである 〓 〓」とあり、ビシュッダシンハの翻訳は以下に検討する DK. No. 650 ~ 2 以外に、ブラジュニャーヴァルマとイエシエニンポ Ye śes snin po (或いはイエシエデ; 注 1 註 3, No.767 参照) が翻訳したものを彼とサルバジュニャーデーバ Sarba dzñā de ba とペルツェクが校閲し確定した DK. No.74 と、彼とゲ [ワイ] ペル dGe [bañi] dpal が翻訳したものをジュニャーナガルバ Dzñā na garbha とルイゲンツェン (注 2 拙稿参照) が校閲し確定した DK. No.182 と、彼とツァン = デーバーンドララクシタ (注 5 拙稿 c 参照) が翻訳したものをルイゲンツェンが校閲し確定した DK. No.193 と、彼とゲワ [イ] ペルが翻訳したものをヴィドゥヤーカラシンハ Bidyā ka ra sin-ha/sin-ha とデーバチャンドラ De ba tsan dra が校閲し確定した DK. No.226, 229 と、彼とゲワイペルが翻訳したものをヴィドゥヤーカラシンハとペルツェクが校閲し確定した DK. No.284 と、彼とイエシエニンポが翻訳したものをヴィドゥヤーカラシンハとイエシエデが校閲し確定した DK. No.354 と、ジュニャーナガルバとルイワンポ Kluñi dbaṇ po (注 1 註 2 拙稿参照) が翻訳したものを彼とデーバチャンドラが確定した DK. No.405 と、彼とペルツェクが翻訳し [校閲して] 確定した DK. No.688 (デルゲ版 No.4092, 北京版 No.5593; 注 1 註 3, 4; 注 6 参照), 700 (同 No.4232,

同 No.5731), 708 (同 No.4219, 同 No.5716), 709 (同 No.4238, 同 No.5724) 等⁸⁾ があり, 彼はシャーキャシンハの先輩であろうけれど, 吐蕃末期のインド人学僧である. **DK. No.650** は 4,500 頌で 15 巻の『釈 [軌論] の注釈』であり, 奥書は No.649 とほぼ同文であるけれど「大校閲の」と「ツァン」を欠いており, 文末に「ここに於いて偈頌は 4,000 [と] 100 語 tshig 有るのである || ||」とあり, 蔵経は頌数が 400 頌 [?] 減少している.

DK. No.651 は 300 頌で 1 巻の『業成就の品』であり, 奥書は「インドの親教師 [たる] ビシュッダシンハと | 翻訳師 [で] 比丘 [にして] ツァン [の] 大徳 [たる] デーパëndララクシタが翻訳し了り且つ | 大校閲の翻訳師 [で] 大徳 [たる] ペルツェクが校閲し了って確定したものである || ||」とある. **DK. No.652** は 1,200 頌で 4 巻の『その注釈』であり, 奥書は No.651 とほぼ同文であるけれど「大徳 [たる]」を欠いている.

DK. No.653 は [1,200 頌で] 4 巻の『縁起の広大解説』であり, 奥書は「于闐 Li [hi] の親教師 [たる] スレーンドラカラプラバー Su rendra ka ra pra bhā と大校閲の翻訳師 [で] 比丘 [たる] ナムカー Nam mkha[s] が翻訳し了り且つ校閲し了って確定したものなのである || ||」とあり, スレーンドラカラプラバーの翻訳は以下に検討する **DK. No.654** 以外に, ヴィマラミトラ Bi-ma/Vima la mi tra と彼とナムカーキョン Nam mkhaḥ skyoṇ が翻訳し校閲して確定した **DK. No.520** がある. 一方ナムカーの翻訳は以下に検討する **DK. No.654** 以外に, ヴィマラミトラとリンチェンデ Rin chen sde が翻訳したものをゲロ dGe blo と彼等が校閲し確定した **DK. No.14** (校訂記あり; デルゲ版 No.21, 北京版 No.160; 注 1 註 3, 4; 注 6 参照) と, ヴィマラミトラと彼とイエシェニンポ等が翻訳し校閲して確定した **DK. No.529** (同 No.3813, 同 No.5217) と, ジュニャーナガルバと彼が翻訳した **DK. No.704** (同 No.4214, 4236, 同 No.5713 (注 6 参照), 5735) などがある⁹⁾. ルイゲンツェンと多数の仏典を共訳しているイエシェニンポ即ちジュニャーナガルバ (注 2 拙稿参照) と共訳しているので, ナムカーはペルツェクと相前後する, 恐らくは後輩であろう. **DK. No.654** は 3,300 頌で 11 巻の『その注釈』であり, 奥書は No.653 とほぼ同文であるけれど「大校閲の」と「比丘 [たる]」を欠いている.

IV. 以上に概観した仏典の中で, 奥書本文を保存する仏典の総量は 71,832 頌で 239 巻 132 頌である. インド人学僧の仕事量を見ると, ジナミトラは 32,897 頌で 109 巻 197 頌であり総量の 45.8% 弱であり, プラジュニャーヴァルマは 27,015 頌で 90 巻 15 頌 37.6% 強であり, シーレーンドラボーディは 18,047 頌で 60 巻 47 頌

25.1%強であり、シャーキャシンハは13,170 頌で43 巻270 頌18.3%強であり、スレーンドラボーディは12,075 頌で40 巻75 頌16.8%強であり、ビシュッダシンハは7,800 頌で26 巻10.9%弱であり、ダーナシーラは5,877 頌で19 巻177 頌8.2%弱であり、スレーンドラカラプラバーは4,500 頌で15 巻6.2%強である。チベット人翻訳師の仕事量を見ると、イエシェデは52,662 頌で175 巻162 頌73.3%強であり、ペルツェクは11,400 頌で38 巻15.9%弱であり、デーバーンドララクシタは7,800 頌で26 巻10.9%弱であり、ナムカーは4,500 頌で15 巻6.3%弱である。また「イエシェデ等が」と表記する仏典はDK. No.617, 620, 624~6, 628, 637~8, 640, 642 の10 仏典であり「ペルツェク等が」と表記する仏典はDK. No.632~3 の2 仏典である。一方イエシェデの蔵訳には「新〔欽〕定語 skad gsar chad によっても改訂し了って〔から〕」とするものが無いので『二卷本語合』を編纂した西暦814 年前後から、恐らく九世紀最初の四半期末頃までの翻訳であろう(注5 拙稿参照)。ペルツェクと、彼の後輩であるデーバーンドララクシタと、恐らく後輩であるナムカーの蔵訳仏典は、同第二の四半期の開始前後頃からDK. を編纂した西暦836 年までの間の翻訳であろう(注1 註2 拙稿参照)。

上記Ⅰに区分した仏典の内DK. No.621~5 は『瑜伽行の地〔論〕』の「別出」と注釈であるのでDK. No.626 を含めて、同論の関連仏典あるいは同論の一部として成立過程にあった仏典とすることが出来る。袴谷憲昭氏は、チベット仏教が伝承する同論の著者が無着であり、後代のチベット仏教で言う弥勒〔の〕五部の法 Byams chos sde lña (弥勒の五法 Byams pañi chos lña) の成立が仏教後伝期であることを論じると共に、玄奘(A.D.602~664) の伝えた同論の著者が弥勒であることを疑い、弥勒の歴史的事実性を否定している(注5 袴谷論文参照)。しかしながら後伝期の改訂記があるDK. No.632 ではなく、それがないDK. No.635 に対応する蔵経と漢訳(大正蔵No.1601 (1599) 参照) が共に著者を弥勒としており(注5 袴谷b 論文参照)、玄奘が帰国して以後のインドに於いて弥勒の伝承が途絶えたり、前伝期である吐蕃期のチベットに弥勒の伝承が全く伝わらなかったとすることは出来ないし、歴史的事実性についても、ないと否定する論拠を提示することはこの場合困難であり、疑問を持つ研究姿勢は何時でも重要であるけれど、否定根拠がない場合には伝承は伝承として受入れておくべきであろう¹⁰⁾。

上記Ⅱに区分した仏典は無着の二種攝〔頌〕であるけれど、世親が著者である伝承のあるDK. No.629『攝秘義〔論〕』(注6, No.5553 参照) を加えており、この概念が吐蕃期に既にあったとするには、論拠が充分ではなく、また上記Ⅲに区分し

た仏典は世親の八部の品〔類〕であるけれど、この八部の品〔類〕の内容が吐蕃期に既に定まっていたとする論拠もまだ充分ではない(注5 袴谷論文参照)。

- 5) 注記内容の重複を避けて本稿の注記番号は下記拙稿(c)の注記番号に続けて注5から開始する。DK. 番号は注1 註2を、吐蕃に於ける梵語仏典の蔵訳に関しては注2 拙稿；注1 拙稿；拙稿(c)「ダルマターシーラ考」『印度学仏教学研究』(『印仏研』) 54-1, 日本印度学仏教学会(日印仏会), 東京, 2005(平成17) 年を, DK. No.614~654 に対応する蔵經奥書は注1 註5 拙稿IVを, DK. の編纂年に関しては注1 註5 拙稿I の前書を, またDK. の同一部分を取り扱った先行研究に袴谷憲昭「瑜伽行派の文献」『講座大乘仏教8 唯識思想』(株) 春秋社, 東京, 1982(昭和57) 年；同(b)「敦煌出土チベット語唯識文獻」『講座敦煌6 敦煌胡語文獻』(株) 大東出版社, 東京, 1985(昭和60) 年；同「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」『チベットの仏教と社会』(株) 春秋社, 東京, 1986(昭和61) 年があり(同『唯識思想論考』大蔵出版(株), 東京, 2001(平成13) 年は研究余史を付して三論文を再録している) 参照頂きたい。なお袴谷b論文がDK. 中に対応仏典がないとするS632はDK. No.624が対応するであろう。
- 6) 西藏大蔵經勘同目録編纂所, 大谷大学真宗総合研究所西藏文獻研究班『[大谷大学図書館蔵西藏大蔵經] 丹殊爾勘同目録』I -1~6, II -1~3, 京都, 1965~1983(昭和40~58) 年, 1985~1997(昭和60~平成9) 年のNo.5544, 5548, 5553を参照頂きたい。
- 7) DK. No.641；拙稿「敦煌蔵文資料に於ける宗義系の論書(2)」『印仏研』29-1号, 日印仏会, 東京, 1980(昭和55) 年を参照頂きたい。
- 8) 注1 註3の訳者名の索引によれば, この外にDK. に記載の無いデルゲ版No.164, 4060, 北京版No.831, 5561の奥書でもビシュッダシンハが翻訳に関与したとしているので, 注1 註3と注6の『勘同目録』を参照頂きたい。特にデルゲ版No. 4060, 北京版No.5561は彼とサルバジュニャーデーバとツァン=デーバーンドララクシタが翻訳したものをマンジュシュリーヴァルマ Mañdzu śrīvarma が校閲し確定したとする。この記述内容はマンジュシュリーヴァルマがデーバーンドララクシタの先輩であり, 吐蕃末期のチベット人翻訳師であることを示唆する(注1 註10 拙稿；注5 拙稿c参照)。
- 9) 注1 註3の訳者名の索引によれば, この外にDK. に記載の無いデルゲ版No.1671~2 北京版No.2543~4の奥書でもナムカーが翻訳に関与したとしているけれど, 両仏典はタントラ仏典であり, 後任期の別人物の翻訳であるかもしれない(注6参照)。
- 10) DK. No.619に対応する蔵經奥書の直前の文で無着と聖 Mi pham pa (弥勒 Mi pham mgon po) に関連している。

〈キーワード〉『デンカルマ目録』, 『瑜伽師地論』, sdom rnam gñis, pra ka ra ṇa sde brgyad
(国士舘大学教授)

rage illusion, the appearance of water in this illusion presupposes the following two things: the water has been previously seen; and, sands heated by the sun are present.

Prajñākaragupta, a Buddhist idealist, criticizes this view of Kumārila's by saying that there is no way to know the existence of things that do not appear to a cognition. According to Prajñākaragupta, if we see an object other than what we are seeing, then we would have the cognition of yellow when we see blue; therefore, what we are seeing is just what appears in the mind.

It is to be noted that in the view that every cognition has a general character, i.e., the self-revealing character, the problem posed by Matilal is easily solved. For, there is no difference between the water which appears in an ordinary cognition and that which appears in a mirage-illusion, because both appear in the same form of 'water.' On the contrary, if the realists insist that there appears the external object even in the illusory cognition, they have to clear up the problem: How is it that only through an ordinary cognition we see what we are seeing now and here, and not through illusory cognition?

176. Old Tibetan Translations of rNam par śes paḥi bstan bcos

HARADA Satoru

The *dkar chag lDan dkar ma* (A.D.836) mentions 41 Tibetan translations of Buddhist scriptures in its chapter xxiv, rNam par śes paḥi bstan bcos (Treatises on Cognition [only]), namely Lalou §.614-654. This chapter consists of Buddhist scriptures which are related to *Sa sde lña* (§.614-626), i.e., *rNal ḥbyor spyod paḥi sa*, and *sDom rnam gñis* (§.627-631) by *Thogs med*, and *Pra ka ra ṇa sde brgyad* (§.632-654) by *dByig gñen*, i.e. *Saḥi rtsa lag*. In this paper, I examine the colophons of these works extant in the Tibetan Tripiṭaka. Two points are clear. (1) Tibetan translations were translated in a period from around A.D.814 until A.D.836. (2) We can not deny the fact that the author of the *Yujiaoshi Dilun* is *Byams pa*, as introduced by Xuanzang (A.D.602-664), and also we can not deny the possibility of the historical existence of *Byams pa*, while *Byams chos sde lña*, i.e. *Byams paḥi chos lña*, was realized in the *Phyi dar* period.